2020 年 3 月 15 日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所 受難節第三週主日礼拝　NO.1111
聖　　書　　詩編 41:10／ヨハネによる福音書 13:3~8
説　　教　『 足を洗う愛 』

「(イエスは)食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた(ﾖﾊﾈ 13:4~5)」。場面は最後の晩餐時。ヨハネ福音書には「パン裂き」の記述はないが印象的な「洗足」が記されている。

「洗足」とは何であろうか。日本で足を洗うと表すれば「因果な稼業をやめる」という意味。ちなみに「手洗」は人目を憚る場(はばかり)。それにしても手足を洗う比喩は多い。
総督ピラトは大仰に手を洗い、「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ(ﾏﾀｲ 27:24)」と宣言した。「罪を赦す契約の血(26:28)」を洗い落として拒絶する。どうやら、手を洗うと無関係になるらしい。

足を洗う、はどうなのか。「わたしの足など、決して洗わないでください(ﾖﾊﾈ 13:8a)」とペトロが半泣きで言うと、イエスは「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたは何のかかわりもないことになる(13:8b)」と答えている。
洗足は、手洗とは逆に、キリストと弟子がしっかり結びついている姿。

イエスは旧約聖書を引いてユダの背きを示唆する(13:18)。「わたしの信頼していた仲間、わたしのパンを食べる者が、威張ってわたしを足げにする(詩編 41:10)」。このような足によって、キリストと私たちが結びついている。
ペトロが畏れ多いを通り越して「オヤメクダサイッ！(ﾖﾊﾈ 13:8)」と叫ぶのは当然だろう。汚れた足を洗うのは異邦人奴隷の仕事、最下層でもユダヤ人同士では絶対にしない。

洗足は別れの徴なのか。一時的にはそうだが(13:3)、根本的には違う。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう(12:32)」。
去りゆくイエスは、私たちが御国へ昇る道備えをしてくださる。しかし私たちには、今しばらくこの地上で為すべきことがある(13:14~17)。こういうことから、足を洗ってもらうキリスト者は、今も、後も、永遠に、キリストと共に在る(13:7)。

イエスの姿をもう少し見てみよう。「食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた(13:4)」。綿密な描写が気にかかる。「上着を脱ぐ」ことは何かの言い換えなのか。
力なく漁をしている弟子たち(21:3)に復活のイエスが現れた時、「あの弟子がペトロに、〔主だ〕と言った。シモン・ペトロは〔主だ〕と聞くと、裸同然だったので、上着をまとって湖に飛び込んだ(21:7)」。
ユーモラスな寸劇じみているが、「上着をまとう」とは礼節を守ること。「上着を脱ぐ」ことはその逆だろう。すなわちイエスは、神の子としての聖性を脱ぎ捨て、人間の汚れや腐れの底にまで降って私たちを清めてくださる。
イエスのこの愛(13:1)。上着を脱いだ僕の姿がそれを具体的に表している。

1966 年、沖縄の平良修牧師は、米国アンガー中将の高等弁務官就任式に招かれ、日米両語で祈った。「～新高等弁務官が最後の高等弁務官となり、沖縄が本来の正常な状態に回復されますように、せつに祈ります。～神の子イエス・キリストは、その権威を、人々の足を洗う僕の形においてしか用いられませんでした。沖縄の最高権者、高等弁務官にもそのような権威のあり方をお示しください～」。
この祈りは、沖縄の人々を目覚めさせ希望の指針になった。そうなのだ。神の子が私たちの足を洗って下さることは、解釈せずとも、直感的に、尋常でない愛だと分る(13:1)。愛こそが希望なのだ。

★

≪おまけのひとこと≫
足を洗うことの解釈もいいが　洗ってもらうことへの抵抗感をこの身に覚えてこそ　心はざわめく
それから洗う者になるという障壁が現れる　そこにキリストの幻が見えているなら実現するだろう